

室長落亀利章さんを偲んで

主席研究員 平田文孝

例年、3月は年度末にあたることから、研究室の全員が仕事に追われ多忙な毎日過ごすことになる。この時期、片付ける仕事が多くなっていた落亀さんは、誰もが判るぐらい顔色が悪く、本人も普段と違う身体の不調に気が付かれたのか平成14年4月1日病院に駆けつけたが、そのまま2ヶ月半の入院生活となった。退院後は、顔色も普段と変わらないまでになり、勤務に復帰できたと思われたが、いま一つ身体の調子が思わしくなく再び入院、以後身体の様子を窺いながら養生を行ってきた平成17年2月21日帰らぬ人となった。

還暦と言う節目を迎えたばかりで、享年61歳、あまりにも早い他界となったことが残念であり、またご本人もやり残した仕事を果たせなかった無念の思いでいっぱいであったであろうと思う。

落亀さんは、昭和37年香川県立坂出工校卒業と同時に、京都大学工学部建築学教室内に設立された(財)建築研究協会・棚橋研究室に所属し、建築構造分野の研究を主に設計、現場監理などの仕事に携わってこられた。

殊に、木造建築に大変な興味をもっており、初めて木造を手掛けた西芳寺(別称苔寺)三重塔(新築)の構造について、構造計算で風荷重を検討すると塔は倒れるのだが、実際は倒れもしないでよく建っている、未だ構造上解明されていないものがあるのではないかと口癖のように話しをされていた。また、構造分野の視点から歴史的建造物の修理或いは復元と言う仕事に携わってこられ、氏の業績の中で代表的なものとして、奈良県法起寺三重塔修理(昭和48年)、平城京跡朱雀門復元(昭和62年)、薬師寺大講堂復元(平成4年)等を掲げることができ、木造建築における構造補強とその復元に係る構造の提案が行われてきたが、木造建築に対する熱意は並々ならないものがあり、周りの人達を圧倒させてきた。



更に、鳥取県若桜町吉川小学校体育館新築工事の現場(昭和40年)では、地元民家で下宿住まいをしながら、冬の山間地と言う地理的条件のなか、降積もった雪の山道を1時間掛けて現場に通い監理をされていたことも、当時研究室の先輩諸氏から苦勞話の一つとして聞いていた。

一方、昭和45年頃から大森健二先生を中心に日本建築研究室では、消防設備など防災部門の研究が進められており、落亀さんもスタッフの一員として加わることになり、今日まで

の約35年間、防災に関する計画・設計並びに施工技術の発展に力を注いでこられ、同時に数多くの業績を残された。その代表例として、比叡山延暦寺総合防災施設（昭和59年～平成2年）、東大寺境内総合防災施設（平成元年～10年）、国宝・姫路城総合防災（平成9年～14年）等を掲げることができ、何れも国宝・重要文化財指定或いは世界遺産に登録された建造物などを対象としたものであった。また、全国に先駆けて総合防災システムと言った方式を誰よりもいち早く取り入れ、施設とその周辺のものも含めて如何に火災からこれらを守り、そして被害を最小限に止めるか等について技術的提案を示し、これまで事例がない総合的防災システムを実現させたことは、氏が手掛けた実施設計を通して、現在の防災設備の在り方を示すと同時に、更なる防災システムの研究をすすめ、将来における防災設備の在り方について新たな提案を求めたものと思う。

落亀さんは、常に先進的な考えをもちつづけてこられ、建築構造、建築防災と言った分野の設計計画に当たっては、その主軸となる要因を見つけ出す過程を重要視しており、これを計画のアイデアとして設計を全体的にまとめることで、他のものより一歩進んだ設計の表現が行われてきた。日々、あまり事の多くを語ろうとせず、黙として仕事をしていた落亀さんの姿が研究室にあったが、これからはその姿を見ることができない。

心よりご冥福を祈っております。